

「目をさまして慎んでいよう」(第一テサロニケ五章一―二節)

1 終わりの事柄

先週の永眠者記念礼拝もふくめて、ここ何週間か、キリストの再臨、歴史の終わり、永遠の希望など、私どものいまの生活からかけ離れているように見える将来のことが、講壇から語られ、私どもも聞きつづけています。

それは説教者が意図してしていることではなくて、私どもが教会暦にしたがって教会の歩みを進め、したがってそれに合わせて選ばれている聖書箇所をテキストとしているからです。

教会暦については学びの会でも少しお話ししましたが十分ではなかったかも知れません。簡単にいえば信仰生活のさまざまな側面を一年に振り分けて、その時々で自覚を深めて歩んで行く、そのための仕掛けといったら身も蓋もありませんが、その手がかりになるものです。

教会暦には初めと終わりがありません。流れがあります。私どもの信仰はイエス・キリストによつて基礎を置かれた。教会暦もイエス・キリストから始まります。キリストが生まれ、宣教し、善き業をなした。十字架につけられたが、甦った。キリストは甦ったことを、その甦りの体をもつて明らかに示し、天に上つて行かれた。それによつて私どもの信仰の道が開かれた。ここまでは私どもにとっては過去のことです。

さてこのキリストが天に上られた、代わつて聖霊がくだり、地上に教会ができるわけです。伝道が始まります。私どもが、罪深い、そのままでは決して神の前に立つことのできない私どもが、にもかかわらず救いへと招かれ、ともに教会の働きにあずかり、これを形成しながら、それぞれの信仰の道を歩んでいきます。これが私どもの現在です。

しかしこの歴史、神の救いの歴史には終わりがあります。それはキリストが、いま天にあつて父なる神の右に座しておられるイエス・キリストがもう一度世に来られるときです。その時死人は甦らされます。そして神の前に立たされます。私どもは救われます。世の終わりです。すべての悪の勢力は滅ぼされます。最後に滅ぼされるのが死です。かくてイエス・キリストのご支配はなるのです。その後キリストは父なる神にこの支配を引き渡されます。この世の終わり、神の国の始まりです。これが私どもの将来です。

こうして一年間の教会暦には過去と現在と将来が入っています。一二月のアドベントから新しい一年がはじまり、一月は最後の月です。教会暦のどんづまり、教会暦の大晦日に向けての日々になります。ですからこの季節に世の終わりに思いをはせながら歩んでいくことになります。

こうした歴史の将来のことについて語り、また聞くとき私どもがちゃんと自覚しておかなければならないのは、これらは、何か、一つの哲学、思弁、空想、あるいは願望などではないということです。

使徒たちはそうしたことを勝手に思い巡らしたのではないのです。こうしたことについて聖書が語っていることは、ペトロが書いたものも、パウロが書いたものも、あるいはヤコブが書いたものも、違っていません。それぞれが勝手に空想を巡らしたのであれば、違ってくるでしょう。違わなかったのは、何よりも使徒たちがみなイエス・キリストの語ったことに教えられていたからだと思います。それ以上に、キリストが甦ったこと、その甦りの体をもって弟子たちに現れたこと、そしてキリストをじつさい天に見送ったこと、しかもその際に、天に上げられたイエスは天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様でまたおいでになる（使徒一・一一）という言葉を彼らのはっきり聞いたということ、こうした共通の一つの体験から来ているのだと思います。それが彼らの教えの根っこにある。とすれば空想でも願望でも何でもない。イエス・キリストに対する信仰に基づく、私どもが宣べ伝えなければならない信仰の事柄なのです。

2 主は来られる

「主は来られる」、キリストはもう一度世に来られる、これは福音書から使徒書簡まで例外なく一致し強調されているメッセージです。その背景に、使徒たちの原体験ともいべきものがあつたことは、いま申し上げた通りです。主が来られるときこの歴史は終わります。

この世界とその歴史は無限につづくものではありません。世界は神による天地創造という始まりをもっているように終わりがあつた、万物は新しくされると聖書は考えています（使徒三・二一、黙示録二一・五）。それは世界万物において神の意志が行われるということなのです。

こうした歴史観はイザヤをはじめとした昔の旧約の預言者たちが語り伝えたものですが、時代が進むにつれて、終わりの日の幻を詳しく書き記す文書が数多くつくられるようになります。黙示文学といわれるものです。旧約ではダニエル書、新約ではヨハネの黙示録にその影響が残っています。これら黙示文学の特色は、終わりはいつ来るのか、その時どんな天変地異があるのか、その予兆は何かといったことに強い関心が向けられていることです。

しかし大切なことはキリストご自身はそうしたこと自体に関心をもたれなかったことです（マルコ一三章三節以下）。弟子たちの耳には「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期はあなたがたの知るところではない」（一章八節）という言葉もずつと耳に残っていたはずですが、歴史を統べ治めているのは神です。人間が介入することはできないし、してもならない。そのことは使徒たちの証言を通して当時のキリスト者たちはみなよく知っていたことです。

兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです（一〜二節）。

歴史の終わり、その時がいつなのか、それが分からないことで不安をいだきながら生活する、毎日が落ち着かないというようになる人もいます（四・一一）。大半の人はそうかも知れません。反対に、あるいはそれ故にでしょうか、終わりのことなどできるだけ忘れて、その時はその時、その時までには楽しくやろうという人も当然そこに出できます。しかしそこに共通しているのは彼らにとってキリストの到来は不都合なことだということです。

それに対しはつきりしていることは、キリスト者にとって、キリスト信仰に生きる者たちにとって、主の日の到来は救いの日だということです。

神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです（九節）。

そしてそのキリストが来られるときに至るまでの私どもの在り方について、パウロはこう勧めています。

わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう（八節）。

私どもの地上の歩みはここにあるように信仰と愛、そして救いの希望です。そしてその上でパウロは「身を慎んでいきましょう」と呼びかけています。同じことが、少し前の六節では「目を覚まして、身を慎んでいきましょう」となっています。この箇所で二回使われる「身を慎んで」というのは、元々の意味は、酔っていない、しらふということ。まことの神のみを神とするところから来る冷静さです。醒めている、正気であるという意味です。

なぜこうして勧めが出てくるのでしょうか。それはいまは昼なのだという認識があるからです。少なくとも私どもは夜にも闇にも属していない。光の子であり、昼の間だということがあります。

しかし私どもはそうであったとしても、この世は、全面的に明るい、闇もない、悪もない、悲しみも苦しきもないところではありません。いうまでもないことです。それが私どもの生きている現実です。しかし私どもはもう一つの現実も知っている存在ではないでしょうか。世のただ中にイエス・キリストが来られ、十字架の死と復活によって救いを成し遂げ、その救いに私どもも諸先輩方とともにあずかったのです。信仰を教えられ、愛の生き方へと励まされ、希望をいただくことを許されたのです。それが私どもの知っているもう一つの現実です。信仰の現実です。「この世の有様は過ぎ去る」（第一コリント七・三一）。世の只中であってそうした現実に生きるためには私どもは醒めていなければならない。信仰のゆえに冷静で正気であればならないというのではないのでしょうか。

3 魂の目覚め

「主はおいでになる」というのがこの箇所の基調音です。しかしながら、このキリストの到来の希望によって生きることは、私どもの歩むこの地上の歩みから関心をそらしているということの意味しないことも明らかです。したがってこの箇所の終わりにこう言われています。

主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい（二〇〜一節）。

パウロの勧めは私どものこの地上の歩みに関わります。いまお読みした、「わたしたちが目覚めていても眠っていても」。これは文字通り昼も夜もという意味でしょうけれども、「眠っていても」は死んでもと解することができます。この世にあつてもあの世にあつても、生きていても死んでも主と共にあるために、キリストは十字架にかかり、死んで甦よみがえって私どもの罪をあがない、神と人との関係を回復してくださいということです。

こう辿たどってくれば、主は来られるということは、私どもの地上の生活における私どもの歩みを励ますことであつて、不安にさせたり、眠り込ませたり、快樂追求に走らせたりするものではないことがはっきりします。

昔宗教改革者カルヴァンの「魂の目覚め」「魂の眠り」という不思議な論文を読んだことがあります。カルヴァンがプロテスタントの信仰に移つてまもないころ、彼のもつとも初期の本で、いろんな思想が混在していた頃の作品とされています。当時の有力な考えに、人は死んで魂は神のもとに行く、魂はそこで眠っていると主張しているものがあつたらしいのです。これに対してカルヴァンは、いや神のもとでも魂は目覚めている、主の日の到来とともにこの魂に体が付与され、甦よみがえらされる、それを魂は待っていると語つたのです。

「目覚めている魂」というフレーズが今でも印象に残っています。天上で魂は目覚めている。それならこの地上の生活にあつても私どもの魂も目覚めていなければならぬのではないのでしょうか。この世の動きは慌ただしい。時代精神といったものにもどもは流され、流行にも左右されがちです。ですからまことの神のみを神とする信仰に立つて動かされず、目覚めて（ゲッセマネの園ではキリストと共に祈り戦いに参与することを意味します）、しらふで、正気を失わずにこの世を私どもは歩んでいくべきなのです。

（二〇一八年二月一日）